

## 音の聴こえる絵

## 大石将紀

「サクソフオン奏者」

美術館の中ではダントツにパリの「ボンピドゥー・センター」が好きた。現代の名だたる画家たちの作品が惜しげもなく飾られている常設展と、現代アーティストたちの刺激的な企画展。建物自体も美しく、パリの街を見渡せるカフェもある。訪れる度に新しい発見があり、今でもパリに行ったら必ず立ち寄る場所だ。

そのボンピドゥー・センターで演奏する機会を得たことがあった。パリ国立高等音楽院の即興演奏科に留学していたときに、常設展示室で即興演奏を行うという催しがあった。20世紀を代表する大画家たちの本物の絵の前で、好きなように音を出していいというのである。興奮しないわけがないではないか。始めに広い部屋で、全員で集団即興をする。すると急に展示室に新鮮な風が入ってきて、空気を一変させてしまった。絵の色は生き生きとして、ピカソの女性の首が動き出したり、カンディンスキーの絵のフォルムが回り出したり、ミロの『青』三部作に描かれた黒いボンボンが上下に動き出したような気が

した。それはまったくもって新しい経験だった。

その後、奏者それぞれがあてがわれた部屋へと移動し、ソロで演奏することになった。僕が入ったのは、中央にハンス・ベルメールの球体関節人形がある部屋だ。手が1本しかない代わりに足が4本ある等身大ほどある裸の女性の人形は、一瞬たじろいでしまうほどの存在感を放っている。その横には、白眼で半裸の女性が髪をとかしているバルテュスの『鏡の中のアリス』。そのほか性的な表現の作品を集めた部屋であるのはい目瞭然であったが、何か様子が変だ。

音を出してみる。絵画からの反応はなく、女性たちの動き出す様子がない。それどころか球体関節人形の存在感がどん、とさらに強調されたように感じる。さっきの体験が鮮烈だっただけに、しん、としたこの部屋の空気に焦りを感じた。

違う壁に視線を移すと、シュルレアリスムの絵画が目に入った。ヴィクトル・ブローネルの『空気の威信』だ。さま

ざまな物体で構成された顔のない人体またはロボット。股下の「マッチ棒」がコミカルにも下品にも見える不思議な絵。背後の赤く塗られた建物がモノトーンに沈んだこの部屋の中でひととき目を引いているが、絵の放つ印象は暗い。コミカルな「人体」と鉛色の空の下で建物の陰影が強く描かれ、「人体」以外は誰も存在しないような世界とのコントラストが、不安や恐怖といった印象を強くしている。

「人体」が音によって生き生きと動き出す気配はない。この絵が静物画に見えてくる。無機的なものと有機的なもの、深刻さと楽観。恐怖と笑い。ばらばらに見えるオブジェが一つの絵の中に混在し、関わりをもつことによつて生じる意味。この絵をじつと眺めていると、脳裏に昔見た絵が浮かび上がってくる。頭骸骨や果物、楽器などで「生の空虚さ＝死」を表現する静物画「ヴァニタス\*」とこの絵が重なったのだ。この絵、そしてこの部屋全体のテーマが「(性)生」と死」なのではないかと気が付くと、ようやくこの重苦し

# ヴィクトル・ブローネル

## 『空気の威信』

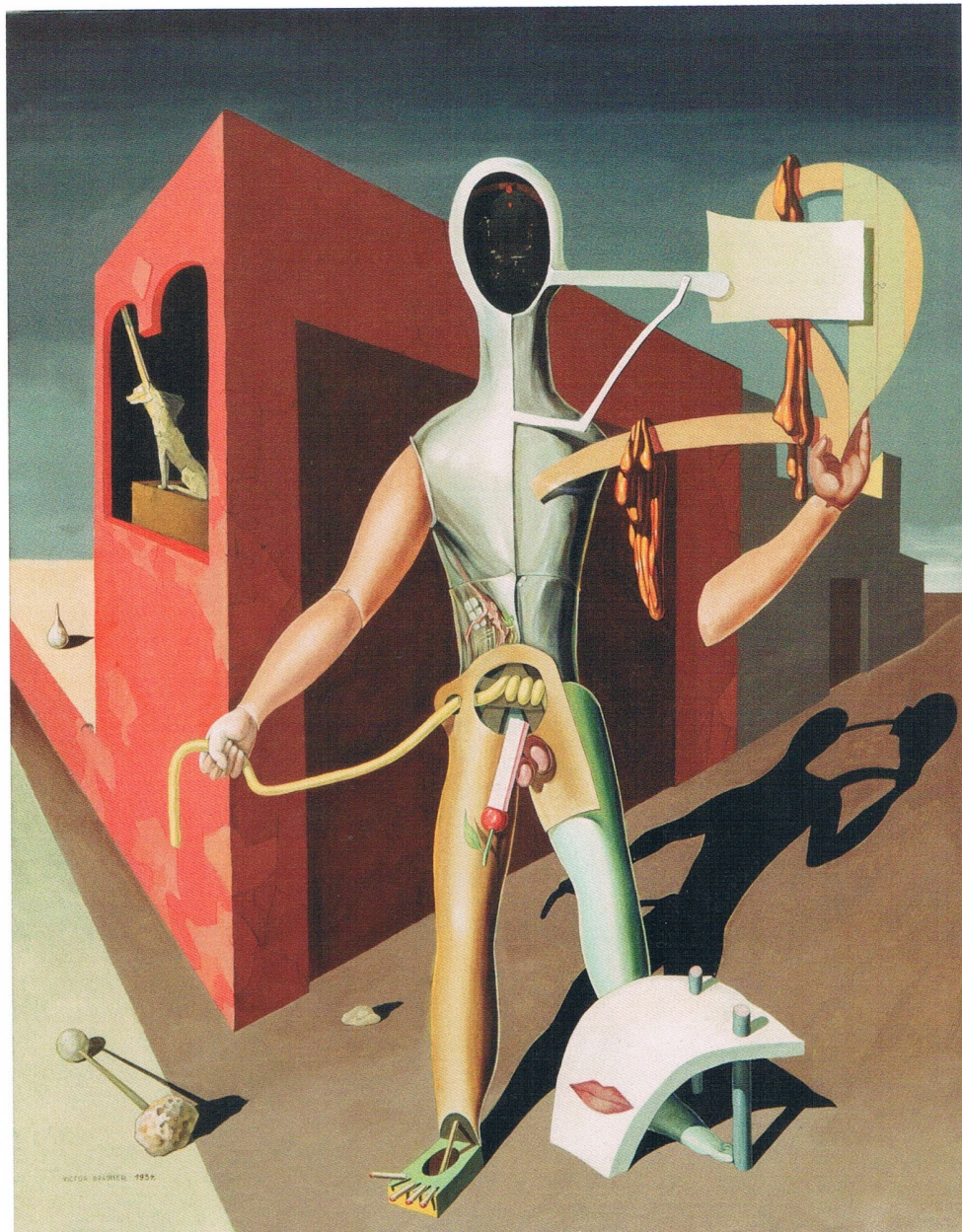
\* 編集部註：16～17世紀のフランドルやネーデルランドに多く見られた手法で、ラテン語で「むなしさ」を意味する。

く、音に反応しない空気を理解できる  
ように思えた。

『空気の威信』は、ブローネルがルー  
マニアのブカレストからパリに出てきて  
初めて行った、1934年の個展に出  
展された絵の一枚である。31歳のブロー

ネルは、シュルレアリスムの創始者アン  
ドレ・ブルトンのお墨付きを得てパリの  
画壇にデビューする。この時期の彼の  
作品はこの『空気の威信』のように、ジョ  
ルジュ・デ・キリコの影響がおおいに見  
られるシュルレアリスム系の作品と、そ  
の後のブローネルの作風に続くモチーフフ

が描かれている作品、それらともまっ  
たく違う作品たちが混在している。パ  
リという誰もが目指す芸術の都で試行  
錯誤をしたブローネルの様子を感じ取  
ることができ、この頃の作品は面白い。  
ピカソやミロの絵の前で音を鳴らし  
た時の生に満ちたあの空気感は本当に



ヴィクトル・ブローネル『空気の威信』1934年／油彩・カンヴァス、146 x 113,5 cm  
ポンピドゥー・センター／パリ国立近代美術館蔵  
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2019 E3372  
写真提供: TPG Images / PPS通信社



#### おいしい・まさのり

サクソフォン奏者。東京藝術  
大学大学院修了後、パリ国立  
高等音楽院にて学ぶ。主に現  
代音楽のフィールドで活躍  
しており、サントリー・サマー  
フェスティバル、東京オペラ  
シティ「コンポージアム」、武  
生国際音楽祭などにソリスト  
として出演。またヨーロッパ、  
アジアなど海外にも招かれ  
演奏活動を行なっている。現  
在東京藝術大学、洗足学園  
大学、大阪音楽大学講師。

爽快で心躍った。それとは対照的に一  
見まわりの干渉を許さないようであり  
ながら、絵画そのものの、そこに描かれ  
た暗示的なモチーフを凝視することに  
よって絵の世界のさらに奥に入り込む  
ことが許される作品が存在し、それが  
芸術の表現に繋がると改めて思った。  
二つの部屋で即興演奏をすることで、  
絵画の持つ力を身をもって感じられる  
素晴らしい経験となった。  
音楽において自分がより惹かれるも  
のも同じであると気づく。なかなかそ  
の世界に入り込めないように感じられ  
る音楽、自分とは相容れない主張をす  
る音楽。そういう音楽に頭を抱えなが  
ら取り組むことが面白い。私が現代音  
楽に強く惹かれる理由の一つだ。